

この空の下で  
生きていく

～世界でたった一人のあなたへ～

# ちがいで こえて 生きて

この世界に、同じ人間は一人もいません。見た目も性格も、一人一人ちがっているのがあたりまえ。年齢や性別、国籍、障害のあるなしに関係なく、ちがいを認めあって共に生きていくことが、「幸せになりたい」というみんなの願いをかなえるスタートライン。心にバリアのない社会をつくるため、わたしたちにできることを考えてみませんか。



を

いく







みんなとわたし



## 「みんなとわたし」

東広島市立松賀中学校 3年 原田 由樹

「えっ、原田さんって中国人なの？」

日本に来てから11年間、そう言われるのはよくあることでした。

最初の頃は、そう言われる度に悲しくなって、自分だけが仲間はずれになった気がしていました。そして、本当に仲間はずれにされていました。

4歳の頃から日本で暮らし始め、保育所に入園した時はまだ言葉が通じなかったけれどたくさんの友達ができました。そして、私は普通にみんなと同じだと思っていました。

しかし、不幸は突然やって来たのです。「原田は国が違うから仲間じゃないよ」

小学2年生だったと思います。クラスの男子の

一言が、私をととても苦しめました。

確かに、親はいつも中国語を話しますし、料理も日本と違います。でも、私は日本語を話しますし、自分を外国人だと思ったことなんて一度もありませんでした。だから、その一言に私は大変傷ついたので。

そして、「私はどうして、みんなと違うの?」

そう言って、母を困らせたこともありました。

外国人だからって、何だと言うのでしょうか。私は、みんなと同じ人間で、大きく言えば、同じ地球の上に住んでいるのです。

しかし、最近では自分から中国人だと宣告するようにしています。ある日から、

私は自分がみんなと違うということを誇りに思えるようになったのです。

そのきっかけとなったのは、同じクラスの女子たちの会話でした。「○○さんって、フィリピンと日本人のハーフなん?」「うん、そうよ。知らなかったん」

思いがけない一言に、○○さんがあたり前のように答えた時でした。私の今までの考えや思いが、一気に和らいだ気がしました。

みんなと違うことを嫌がっていた私とは全く正反対に、彼女は、人と違うことが普通だというように堂々としていました。



私は、自分の今までの考えを恥ずかしく感じ、彼女がかっこいいと思いました。

それ以来、「原田さんって、中国人なんだ」と言われた時には、「そうなのです。ついでに、宇宙人なのです」と冗談もいえるようになりました。

もう私の事を仲間はずれにする人はいないと思います。なぜなら、私は私であって、世界の中でオンリーワンだからです。

そして、誰もがオンリーワンなのだと、私は思えるようになりました。

今まで、○○さんには感謝しています。彼女はきっと、そんなつもりではなかつ

たと思いますが、一言「ありがとう」と言いたいです。

世界中には、顔や性格などが異なった人々がたくさんいます。それなのに、一部の人たちが、顔つきや肌の色や言葉の違った人々を認めないという事実はとても悲しいことです。地球上の生きているもの全てがパズルのピースだと思っています。だから、あてはまらないピースはありませんし、一つでも欠けるとパズルが完成しないように、私たち一人一人が大切なのです。

そう私は、思い続けたいです。





## 「感じる手で」

呉市立宮原中学校 3年 市村 麻実

4月。新入生が入ってきたことで気持ちも新たに、私は最後の中学校生活を送っていました。同時に、部活の吹奏楽にも力を入れていました。

Aちゃんは、最初『おとなしくて可愛い感じの子』とっていました。今年の吹奏楽部に入ってきた1年生は約10名。その中で彼女は特別目立つ存在ではなく、ただの新入部員という感じだったのです。

「パーカッションのパート、何人やりたいって子がおるかねえ。」友人とそんな会話を交わしながら、いつもの基礎練習をしていると、何人かの女の子がやってきて、「パーカッション希望」と私達に伝えました。そしてその中には、Aちゃんもいました。

早速、その子たちに基礎を教え始めたのですが、Aちゃんは何故か他の子たち

より覚えが遅く、どうしたのかなと思っていると一人の女の子が教えてくれました。「Aちゃんは手が思うように動かさんのよ。」(えっ、どうして。)言おうとして口をつぐみました。そうか、Aちゃんは障害のある子なんだ。次いで絶望感が生まれてきます。(そんな子に、私はちゃんとパーカッションのパートを教えることができるのだろうか…。)ただでさえ今まで先輩まかせだった「新入部員に基礎を教える」行為に、更に重い何かのしかかってくるようでした。何を教えても上の空、練習をしてねと言っても一人で遊んでばかりで、正直苛立ちも感じていました。

しかしそんなとき、顧問の先生が私にこんなことをおっしゃいました。

「夏のコンクール、Aちゃんをタンバリンで出そうと思うのだけど。」

「えっ。」

(だってAちゃんは、他の子が楽器に触らせてもらえるようになってもまだ基礎練なのに…。)

そう否定しようとしたのですが、先生は続けられました。

「あの子、あなたが見てないところではいつもすごく頑張ってるし、本当は負けず嫌いで人一倍努力するんだと、先生思いますよ。」

意外でした。Aちゃんはただ遊んでばかりで不真面目と思っていただけに、信じられない感じでした。でも確かに、私はAちゃんのことをちゃんと見ていなかったように思えます。「障害があるから…。」という壁も、もしかしたら自分が知らないうちに作っていたのかもしれない。(明日

からは、もっとAちゃんのことをしっかり見てみよう。)

そして次の日から、一対一で基礎練の様子を見始めました。すると先生の言うとおりに、彼女はできないところを何度も何度も練習し、私が決めた練習メニューをどんどんクリアしていったのです。

「知らなかった…。」

心の壁と障害のある人への勘違いが取り払われた瞬間でした。(これならもしかしたら本当にコンクールに出られるかも。)心臓がドキドキしました。

数日後、私は彼女に一つの大きなタンバリンを手渡し、コンクールの曲を教え始めました。

「Aちゃんいい？ ここはタンバリンを3回たたくんよ。他のところは、音鳴らしちゃあ



だめよ。」

Aちゃんは静かに、でもにっこりとうなずきます。

「じゃあ、ちょっとやってみようか。」

「…ポン、ポン、ポン。」

「すごいすごいっ。次いくよ。」

そうして、毎日毎日ひたすらタンバリンをたたき続けていくと、慣れてきたのか彼女は少しずつ楽しそうに演奏するようになりました。

「最近部活、楽しそうじゃね。」

友達に聞かれては、Aちゃんのことを自慢して、部活に行っていました。そしてついに、コンクールまであと3日というところまで近づいてきました。

Aちゃんの立ち位置は、私のとなり。演奏中も、私がサポートするということでした。でも、もう私は何も心配していません。

なぜなら彼女は、この何か月間かでみちがえるようにタンバリンが上手くなったからです。難しいリズムのところも、Aちゃんの持ちまへの粘り強さと負けん気でなんとかなりました。

私達の中に少なからずある障害のある人への偏見は、もしかしたら私達自身のほんの少しの努力で、大きく変わるのではないのでしょうか。彼等は大きなハンディーキャップを持ちながら、毎日懸命に、一日一日を諦めることなく生きています。内面を見ずに判断をしてしまうのは悲しいことです。それをAちゃんに教わりました。そんな小さなことで、彼等を否定するのは寂しいです。だから、心の奥の感じる手で、そっと触れてみれば、きっと扉は大きく開くのだと、私は思います。

## 声で伝える、心がつながる 音訳ボランティア。

### 声の便りで暮らしを応援

視覚障害を持つ皆さんに文字情報を提供する方法には、点字にして指先で伝える点訳と、朗読を録音して音声で伝える音訳があります。広島市安佐南区ボランティアセンターの『音訳ボランティアむつみ会』の皆さんは、広島県内でもいち早く音訳に取り組んできました。

広島市安佐南区社会福祉協議会の主催で音訳講習会が開かれ、1983(昭和58)年に区報の音訳をスタート。会員が暮らしのさまざまな情報を選んで朗読する、『むつみ会便り』

もジャンル別にテープ2本に録音しています。2001(平成13)年からは、中国新聞の天風録の音訳もはじめました。発案者の安達たか子さんは、「1か月分を60分テープ1本に収録しています。天風録はニュース性のある話題だけでなく、ほのぼのとした地元の話もあり、音訳で1か月を振り返ってもらうのもいいんじゃないかと。視覚障害が情報障害にならない社会になって欲しい。願うだけでなく、自分のできることをやろうと思ったのが、音訳を勉強したきっかけです」。





## リクエストを励みに

学生時代、放送部員だった経験を音訳に生かしている代表の河野勝美さんは、「いつもは声につながっているリスナーさんと、年に1回、交流会を開いています。メンバーがガイドヘルパーをして一緒に外出し、音訳テープの感想や要望も直接聞いて

います。熱烈なプロ野球ファンからのリクエストで、1年間の試合スケジュールと選手紹介の音訳もしてるんですよ」。30名の会員が、音訳テープを楽しみに待つ55名のリスナーのために、新しい情報、暮らしに役立つ情報を声で伝えています。

## 音訳ボランティアむつみ会

1983(昭和58)年『点字サークルむつみ会』の中に録音班ができ、2004(平成16)年から、点訳、音訳、ガイドの三つの会に分かれて、それぞれ活動をスタート。お互いに連携を図りながら、視覚障害を持つ人々と交流を深めている。

